

第三十九回智山教学大会 記念講演

「天台の論義」

講師 清 原 恵 光

司会 テーマは「天台の論義」です。ご講演なさっていただける清原恵光先生にはお忙しいところを智山勧学会のためにご来山いただき、まことにありがとうございます。

ところで、智山勧学会では教学の推進のために「論義」というものは重要であると考えております。そこで勧学会では、昨年度は楠先生と田川先生をお呼びいたしまして「法相の論義」をご講演いただきました。今回はさらに見識を深めるために天台の論義の第一人者でございます清原先生にお願いすることとなりました。

清原先生は叡山学院の嘱託教授でございます。現在、叡山学院では法華三大部の一つである天台大師の法華文句を教えていらつしやいます。また、先生は比叡山延暦寺の恵雲院のご住職でもございます。さらには比叡山阿彌陀堂の輪番もお務めになっており、公私ともお忙しいなかをご講演を引き受けていただいております。先生には「天台の論義」と題しまして、伝統ある天台の論義をかたちの面を中心にしてご講演していただきます。先生、どうぞよろしくお願い申し上げます。

清原 智山派の小峰先生と私は、年はちよつと離れていますが、大正大学で同窓でして、そんなご縁でもって、論義の研究をやっているので叡山のほうの天台の論義のことを話してくれないかと言われました。私はごく内輪

のお集まりのところで、資料等を持ってきて紹介でもさせていただいたらいのかなと思っていましたら、このような教学大会の公といえますか、晴れのお話させていただくということで、大変光栄に存するとともに、またちよつと戸惑つてもあります。

去年の楠先生の「法相の論義」のご講演を会報等で拝見しましたら、論義の大変複雑な問題、あるいはその流れのなかでの教学の重要な論点をよく選びだして、そして教史的な変遷をまことに的確にお述べになつていらっしゃると思います。本当に頭の下がる思いです。天台論義の展開、あるいはその位置づけといったことは教理的な面ではまだ十分に、天台論義の研究自体も進んでいませんし、私もまだできていませんので、今日お話しさせてもらうところは、天台論義のかたちといえますか、それがどのようなにかたちづくられて現在にまで伝えられているか、また、現在行われているかということをお話ししたいと思います。

資料として一枚の「天台の論義」と書きましたものがございますが、今日お話しさせてもらうレジюмеといえますか、おおまかな概要を書いてみました。あまりかさばってもいけないと思いましたが、裏表に刷りましたし、また、それぞれの資料を張りつけたりしましたので、大変見にくいと思いますが、四枚八ページのを参考にお話しさせていただきたいと思えます。

その資料の①と書いてあるのをご覧ください。ただいま天台宗のほうでは天台宗の宗典が、中国天台の天台大師の祖典等、基礎的なものは大正新脩大藏經あるいは続藏經といったものに入っていますが、日本天台の、しかも中古のものにつきましては、ほとんど活字化されているものは少ないわけです。戦前に天台宗全書二十五巻、日本天台の論書等が刊行されました。それが戦後、ただいま「続天台宗全書」第一期十五巻の編纂が天台宗宗典編纂所で行われています。不肖私もその編纂委員のなかに入っています。特に論義書の刊行について大正大学元学長の天台の大久保良順先生の指示のもとに進めています。

「天台の論義」

論義書のまず第一冊として中古の『盧談』があります。京都には南北朝時代、特に天台教学の研究が活発に行われていました。盧山寺というのがありまして、その盧山寺の、明導照源（一二九八—一三六八）、実導仁空（一三〇九—一三八八）といった学匠の論義の草稿といったもの、これを盧山寺の祖師の御談ということで盧談と言いますが、それが初めて刊行になりました。解題として書目の内容に入る前に天台論義の概要について書きました。それがこの①の「天台の論義」です。これは元『盧談』の折り込みの解題でして、二ページの後ろに「編纂便り」のようなものがついています。今日は論義について、論義のかたちの面についてはここに書いています。そのようなことをお話しすることになろうと思います。

日本天台の教学は、よく言われていますように伝教大師、そのお弟子の四祖慈覚大師円仁、六祖智証大師円珍の三代の間に比叡山の基礎が固まり大成され、九世紀後半には五大院の安然尊者によって教学的に完備されていきます。そののち一時、沈滞していた比叡山の教学あるいは宗勢を盛り返して、新たな日本天台の展開をみるのが元三慈恵大師良源（九一二—九八五）の時代ですが、そういうふうには比叡山の仏教が基礎づけられ、大成され、また発展されたところの祖師たち、あるいは中興の祖師たちをひと口に三聖二師と申しあげます。六祖までを三聖、安然と良源とを二師というわけです。

良源門下三千の弟子のうち、『往生要集』を書かれた恵心僧都源信が一の弟子で、それと檀那院の僧正覚運の二人が出られます。この末流に平安末から鎌倉時代にかけて学匠が輩出して、いわゆる日本天台、中古天台独自の発展が見られます。その発展は比叡山、天台本覚法門というふうなチームでもってこのごろ盛んに紹介されて、岩波の日本思想大系の一冊にも入っていますが、そういった新しい口伝を重んじる、観心的な、大変主観的な学風の教学が展開していきました。

そういう文献が平安時代後期から末期にかけて、その後、南北朝時代、あるいは室町時代にかけて集められて

大成されていきますが、論義の文献といったものもそれとほぼ同じような時期にそれぞれ集められていきます。ただし、論義というものは祖典の解釈に基づいて文献的に道理を尊重して、文献の典故に基づいて論をしていく。異説の会通におきましても欲しいままな会通を許さないわけです。本覚口伝法門というのは、衆生本来仏なりといった煩惱具足の当体当相、このままに仏であるというような観点から、己証というものを、おのれの悟りを第一にして、文献主義の立場をあまりとらない。比叡山の中古以降の文献におきましても、祖師の解釈を重んじて、解釈のそれを揺るがせにしない立場の学匠あるいは文献を釈家、それに対して口伝・観心的な性格のそれらを記家という区別がなされたりしていますが、いまの本覚法門のそれは記家の範疇に入る性格のもので、論義のそれは釈家の性格のものであるというふうには日本天台の文献を分けたりもしています。ともかく平安後期から末期、そういう新しい比叡山の教学の展開、あるいは信仰の展開がありました。その文献においても、あるいは学匠においても、両方の立場があるということが特に重要です。

いまの日本天台の論義書がこれまであまり研究もされなかったのは、日本天台の教学体系が大変精緻なものであることと、同時にそういった論義のそれはいちおう表の学問として、信仰あるいはその奥の立場においては観心主義に立ち、口伝を構えるところの本覚的な法門が重視されたからです。そういう面もあつて論義というものの研究等もあまり進んでいないのではないかと思われます。

前置きが長くなりましたが、天台の論義が制度として始まるのは、伝教大師によって延暦十七年の祖師の天台大師報恩会として霜月の十一月に行われた霜月会法華十講です。法華三部経十巻を講論するもので、当初は伝教大師一門による行事でしたが、三年後の延暦廿年には南都の代表的な学匠十人を招いての開かれた場となりました。大師入滅の翌年、弘仁十四年（八二三）祥忌の六月に弟子の義真（初代座主）により、霜月会にならって六月会（みなづきえ）法華十講が営まれます。この霜月会と六月会とを叡山の両会（山上の両会）と称し、やがて

「天台の論義」

勅会として権威づけられ、また学徒撰抜の試験論義である堅義がそれぞれに加えられます。

良源による叡山の中興は真俗両面に亘ってめざましいものがありました。とくに十八代座主上任の翌々年、康保五年（九六八）六月会に広学堅義を始めたことは天台論義確立の上に大きな出来事でした。広く宗の内外に亘って論じ、天台の宗意を確立する趣旨の試業論義で、南都興福寺の研学堅義、三井園城寺の碩学堅義などともに権威ある論場となりました。広学堅義始行に先立ちその前年に良源門下の禅芸が山門最初の探題に任命されます。探題は南都では出題者のようですが、叡山では判定を決する証義（精義）をも兼ねる論場の最高権威者です。この堅義はいまでいうと新制大学の大学院の博士の審査のような権威をもっていたんだろーと思えます。比叡山大学というものが伝教大師によって打ち立てられ、伝教大師による学則の山家学生式、十二年籠山等の制度も発足しますが、そういった叡山独自の肝心な、学徒の学業の完成を見極める機能が比叡山にはまだなかったのが、元三大師によって整えられてゆきます。

それとともに京都の都にも比叡山の勢力が展開していきまして、いわゆる北京の三会ができました。円宗寺の法華会が延久四年（一〇七二年）。それから続きまして法勝寺の大乗会、これは華嚴、般若等の五部の大乘を講義するものですが、その大乘会が承暦二年（一〇七八）年に行われます。同じく円宗寺の最勝会、これは金光明の最勝経を講義する法会ですが、これが永保二年（一〇八二）年に行われます。これが北京の三会として南都の興福寺の維摩会等の当時の最高の学徒の論場であったところの南京の奈良の三会に対比されるようになります。また、京都の天台系の寺々や、あるいは比叡山から元三大師ののちに分かれることになります、三井の園城寺におきましてもそれぞれ、三井の園城寺には智証大師の御忌の十月会の十講、それから京都の法成寺の八講等が行われます。そこにそれぞれ堅義が加えられて、園城寺の堅義は碩学堅義といいまして、法成寺のそれは勧学堅義といえます。この勧学堅義はその後あまり機能していないようですが、ともかく山門の山上の広学堅義とあわせて

天台系の三豎義となります。

それから比叡山はご承知のとおり東塔、西塔、横川とそれぞれ伝教大師の時代、伝教大師のお弟子の時代とわたりまして三つの地域に、三つの単位寺院（三塔）でもって構成されている複合寺院です。横川と書いて「よかわ」と言います。その東塔、西塔、横川はそれぞれに独自なそこにおける講演の制度ができていきます。東塔は常行堂における三十講です。法華經の二十八品に開・結の無量義經と觀普賢經をあわせて三十講になります。西塔は二十八講ですが、これは法華經そのもの二十八品を講論するものです。横川の四季講というのは、横川の四季講堂に五部の大乘、即ち華嚴・般若・大集・法華・涅槃の五部の大乘經を講義するものです。これは康保四年で広学豎義が行われる前の年ですけれど、村上帝の御願によって元三大師の住房であった四季講堂で行われたのです。またそこにおいて法華八軸を講演する法華八講が行われます。このように比叡山の主な法華經を中心とする講演の形態、あるいはその場が制度として確立していくことになります。

そこにおいて行われた講演、法要の形式は、仮に法式と書きましたが、山上の二会の霜月会、六月会というのは法華十講であります。法華八巻にいまの開結のそれぞれ一卷（無量義經一卷、觀普賢菩薩行法經一卷）あわせて十巻を一巻ずつ講論していくものが法華十講です。それから法華八講とは、言うまでもなく法華八軸を一本ずつ講論していくものですが、それと三十講があります。それから講經論義と書きましたのは、法華經全体、法華の三部經、あるいは法華經そのものの全体を講義するものは十講、八講、三十講と言いますけれど、その法華經の一品、あるいは一卷に問題を取りまして、そこから問題を選んで、主題と副題を普通は業、副ということと二題とりますが、それを主にして問者と講師においてつがいをなして行うところの一座の論義を講經論義といいます。

それから例講牒論義といますのは、これは各叡山のそれぞれの住房、あるいは東塔、西塔、横川のそれぞれ

「天台の論義」

を構成するところの地域の本堂において学問研鑽のために行われるものでして、これを例講といいます。これにはたくさんものがありました。いま現在は伝教大師のご廟所の浄土院で毎月四日に行われる伝教講という講論の法要があります。あるいは、日吉神社の社頭で法華八軸を行う日吉礼拝講というのが法華八講をもって今日行われていますが、そのほか、比叡山の三塔の、特に若年の僧徒が集まって研鑽するという三院講、あるいは比叡山が信長の焼き討ちのあと、復興されるのに大変功績のあった慈眼大師天海大僧正をおまつりする山麓の慈眼堂で二月、五月、十月に行う慈眼講などがあります。

牒論義というのは、定められた問いを発する者のほかに聴衆としてその法要に臨みました者が全員一問ずつ、「ちなみに一問を呈せば」という前置きをして、それぞれその問題に関連するものを問うていく。つまり一人の講師に専任の問いをする者、問者といいますが、専任の問者が問いを発して、それが終わったならば、そばで聞いていた者がそれにそれぞれ問いを発するものです。

論義の形式としてもっとも複雑なものが豎義です。これは広学豎義における五問十題の構成などで、それぞれ問題の出題のされ方、あるいは組み合わせられ方、問答の進め方などそれぞれの場面に変わりががあります。

そういった形で行われてきました天台論義の論ずる範囲は、大きくは天台の、ことに日本天台は円、密、禪、戒となります。天台大師の法華経を法華円教、それに密教、東密に対して台密ですが、密教。達磨禪は、伝教大師はやはり相承されたというので、これはのちに展開はありませんが、禪。それに戒律、これは大乘戒です。初期は円、密、禪、戒と言っていますが、これに天台浄土教というのを加えて円、密、戒、浄、の四宗というふうにも言ったりします。

その二本柱となるのが法華経の天台の円教と台密です。それぞれ密教は密教の論義、遮那業の論義というもの

があります。しかし、後者は特殊なものでして、いまここに体系として述べますのは円教でして、密教に対して法華円教を顕教というふうに言います。密教と対比する場合に法華円教を仮に顕教と言いますが、普通は天台論義と言う場合はこの顕教・円教の論義を言いますけれど、この論義が盛んに行われ、また文献等が集められていく過程において三部門を形成していきました。それが宗要、義科、問要というものです。

普通は宗要、義科、問要の順番で言われますが、宗要というのは宗旨の肝要を述べたもの、問答したものでして、これに九十四論目を連ねるわけです。しかし、天台論義の基礎となったものは義科です。これはそれぞれの天台の祖典、天台大師の講説である『法華玄義』・『法華文句』・『摩訶止観』の天台の三大部に主として基づきます。そのほか『維摩経疏』、あるいは『四教義』、天台大師の『四教義』で、維摩経の玄義分を別出したものです。それから涅槃経の注釈書の『涅槃経疏』、これは天台大師のお弟子の章安大師灌頂の撰述です。それから、『観無量寿仏経疏』、これは天台の講説と伝えられているものですが、そういった天台の三大部をはじめとするところの天台の主な祖典のそれぞれの教義の部門に基づいて立てられた論義が義科というものです。

義科というのは仏教のそれぞれの教義の部門、義をことわるといふふうに読んだりしまして、それぞれの教義の重要な点を自宗と他宗の教義と相對して明らかにする。他宗との義を区別し、自宗の義を明らかにするというものであって、論義のもっとも基本になるものです。その大枠になるような義科の区分けが十六、あるいは二十二ありまして、これを十六算、二十二算といいます。『法華玄義』においては教相・十如是・二諦・眷属妙・十妙・五味・十二因縁の七算を数え、天台のいわゆる教判に相当するものは教相義です。それから、十如是義、二諦義、眷属妙義といったものは教理で、天台の諸法実相円融の円教理論です。『法華文句』は法華経の文々句々を本文に入って解釈したのですが、それに法華の一乗の開顯が三巡りにわたって、まずは道理、それから譬喩、それと因縁説の三周にわたって法華経には懇切に説かれているという法華経の説相についての問題を扱うのは三周義で、

「天台の論義」

以下『法華文句』に明かす即身成仏義、三身義、囑累義、一乗義等、五算があります。三身義というのは、法華經の如来寿量品第十六、本門の開顯の一番中心である五百億塵点劫の久遠の本仏に関して明かされるところの天台の法報応三身説の問題です。

天台の『玄義』『文句』は法華經に基づく教義書ですが、それに基づく実践の書であるところの『摩訶止観』に六即義・四種三昧義・被接義・名別義通義とあります。それから、そのほかに『維摩經疏』が仏土義。天台は凡聖同居土、方便有余土、実報無障礙土、常寂光土、と四土を立てますが、その四土についての仏身・仏土論です。『涅槃疏』は仏性義です。涅槃の悉有仏性説は、天台の一乗義の極説とされるところです。それから『四教義』、に菩薩義と七聖義、『觀無量寿經疏』から九品往生義、こういったものが教相義、十如是義、何々義といひまして、義科のそれぞれの部門とされています。

算というのは、問答の場合、問題が木の札に書かれて提示されるので算となりますが、特に宗要と義科の問題を算といひます。問要の問題は算とは言わないといひますが、論題と言わずに算の題、算題と言ったりするのは豎義のときでして、普通の論義の場合には論題と言ってよろしいといひますけれど、區別して言う場合には、天台の宗要、義科、問要という二つのなかで宗要と義科の両方について算、あるいは算の題といひます。

そして義科のなかから、いま言いました重要なものが宗要として選ばれました。昔から言い伝えられているのは、元三大師が比叡山の守護神であるところの日吉神社の社頭において九十日の間、講論が行われたとき、宗要の論題、一番初め八十四の論題が元三大師によって定められて、あとはその弟子によって十問題が追加されて、宗要九十四論目が定まったと言われます。これは伝説ということとして、義科のなかの重要な問題が次第に重要視されて特別な扱いを受けるようになったと思われる。

そういったものが鎌倉時代ごろになりますと、論義の文献が次第に集められていきます。そして類聚書、論義

のいろいろな問題を集めたものができていきますが、そのできていくときに、宗要の九十四題にもやはり配列等が考えられていくことになります。宗要六部の部類立てです。元三大師良源のあと、そのお弟子の恵心僧都源信、檀那僧都覚運という二人の方に由来するところの末流において独自の学派を形成していきます。

それぞれ四派に分かれて、恵檀両流、八流というふうにも言われていますが、恵心流の系統においては六部の順序は仏、五時、教相、二乗、菩薩、雑として、檀那流は仏、菩薩、二乗、教相、五時、雑というふうには、流派によって論題の配列を変えています。恵心流の配列は仏法僧の三宝の配列であると言われています。仏部は仏宝です。五時・教相の二部は法です。雑は別として、二乗・菩薩は仏法僧の僧ですから、その仏法僧の三宝の配列となります。檀那流のほうは人法の配列といまして、仏・菩薩・二乗、仏教を実践していく、あるいは説く主体であるところの人。法は教相・五時です。人法、人と法の次第となっています。

宗要・義科・問要論義の主な文献としては国訳一切経と大正新脩大蔵經に、いまの宗要論義のなかの白眉とされるところの『宗要柏原案立』というのが一つ入っています。ほかは天台宗全書に主なものが若干収められています。そのなかで、宗要では三つの論書を挙げておきます。『宗要白光』は九巻でして、檀那流の系統であるところの叡山黒谷の恵鎮の講述です。この方は鎌倉末から南北朝初めに活躍された方ですが、元応二年から元亨元年にこの九巻の講演がされています。これは問答そのままというよりもそれぞれの論目ごとに問題点を開示し、また典拠について合文・違文を挙げています。

算題の所立、答えは流派によって違う場合があります。それぞれ東塔の義、西塔の義などと問題によって分かりますが、それもやはり祖典にどちらにもとれるような両様の説明が施こされている場合があります。その所立によく合致するものを合文といえます。それに対して合わないものを違文といえます。違文はより高次の立場から解釈を施して会通していかなければなりません。それから箇々の論目の由来となる祖典の箇所を立処といいま

「天台の論義」

す。

こういうふうな項目をもうけて、それぞれ問答に対する取り扱いの仕方、あるいは問題点を書いていますので、この『宗要白光』は論争そのままの論義の草稿、論争そのものではないわけですが、論義のそれぞれの取扱やそれぞれの論目の問題点をよく指摘し、また叡山のそれぞれの諸流の説を挙げている貴重なものです。恵心流の系統のものが残っているものが多いなかで、檀那流の系統のものとして『宗要白光』は貴重なものであると言えます。

その次の『宗要柏原案立』というのは、江州柏原、成菩提院の貞舜の撰になります。貞舜は比叡山にあつては西塔の宝園院というところに住持していました。だいたい東塔は檀那流、西塔、横川は恵心流というふうには、比叡山においても地域によってそれぞれ、恵檀両流それぞれ学風を異にしてそれぞれ競い合っていたわけですから。

『宗要柏原案立』は大正新脩大藏經にありまして、国訳一切經の和漢撰述部にもあります。それから『宗要上三川』とありますが、「上三川」と書いて「かみのがわ」と読みます。下野・上三川の普門寺信俊の撰です。平安時代から鎌倉時代にかけて比叡山の都の天台が関東に伝わり、それを田舎天台と言います。その田舎天台の代表的な寺院である常州黒子の千妙寺系の人です。天台宗全書の第六卷にありますが、これも『宗要白光』と同じような傾向の本です。

『柏原案立』は論義の形式にしたがつて、実際の論義に用いられるかたちでつくられています。あとで論義の構成等も申し上げますが、普通の論義は二重、それを第三重において大変精細に論じていくと二重、豎義においてはもう一つ重を加えて四重、あるいは五重というふうになります。その代表的な形態である二重形式のもっとも典型的な論草書として整備されたかたちを示しているのがこの『宗要柏原案立』です。

このほかにも宗要書で比較的初期のものであると思われる、やはり恵心流の『政海類從抄』などというものが

あったりしますが、これは続天台宗全書に近く刊行されるものでして、宗要の比較的初期のものとして刊行を待たれるものです。そのようにほかにもこの宗要書はたくさんありますが、いまここに書きましたものだけが現に披見しやすい叢書等に入っているものです。

義科は先ほども言いましたように、盧山寺流の実導仁空の『義科盧談』、これが続天台宗全書の論草の第一でして、第二に『文句』、『止観』等の部分が加わる予定です。ともかく天台の三大部の『玄義』に関する部分二十六卷、七義科十六題二十九論稿で、二十九の問答がここにはあります。叡山は出題と精義を採題が一人で行いますが、この『義科盧談』に精義の一部分も入っています。「盧談」というのは論義書のもっとも精細なものであると言われて、披見がなかなかできない秘書とされたようです。内容は十分整理されてないものもありまして、まさに講論、問答の實際を伝える草稿であるみてよいと思われれます。

『義科相伝書』は、十六算、つまり義科の二十二のうちの十六というのは基本的なものを十六数えるということにして、この十六の数え方もいろいろな立場、いろいろな書物によって違います。ともかくこの日光中禪寺の静什は『義科相伝鈔』において、先ほど書いた二十二算のうちの十六義科をここに挙げて、一義科ずつにそれぞれ一卷をあて、全部で十六算百五十六題が示されています。そして、やはりこれも問答に近いかたちになっています。

宗要・義科・問要の最後の問要というのは、宗要・義科のいずれにも入らないと言います。しかし、問要論義も、義科のそれぞれの十六算なり二十二算のどれかにもとは由来するとみられますから、宗要・義科の体系化が進んで、二十二算、十六算等の論題がだんだんと固定化していくのちにおいて成立した論題が問要ということを集められたんだらうと思います。これには天台の法華経の、お釈迦さんが法華経を説かれた目的は何か、人々をみな仏たらしめんことである、といったことを明らかにするところの開示悟入、法華経の方便品の一番の眼目で

「天台の論義」

すが、その開示悟入などというのがこの問要論義のなかに入っているわけです。重要な論題である西方己心、彌陀を念ずる場合、西方の彌陀を念ずるのか、己心の彌陀を念ずるのか。そういうふうな天台觀心の重要な論題と思われるものが問要論義にも入っていますので、決して宗要・義科以外の雜論義ということでは片づけるものではないと思います。

ともかくその文献は『天台問要百題自在房』というのですが、これは普通『自在房』あるいは『百題』というて問要論義の代表的なものとなっています。これは鎌倉末にもっとも活躍した日蓮と同時代の、あるいはそれより少しのちの時代かもしれませんが、その時代の叡山の恵心流の巨匠静明の撰とされていますが、後世の書き入れ、あるいは竄入等が多いように思われます。語法が候文で、「何々で候」と書いて「そう」、「あるまじいことである」というふうな言葉を使いまして、室町時代の論草等によく表れてくるもので書かれています。静明というけれども、基本は静明さんのものとしても、完成はもっとあとになるだろうと言われています。古宇田亮宣という方が和訳されたものが出ていますが、天台宗全書にはありません。

それから『直雜』ですが、横川・聖行房の直海の撰で直海による問要のノートという意味で『天台直雜』（てんだいじきぞう）と言われています。これは天台宗全書の三卷、十七卷、二十五卷の三冊全部をあてまして二百五十四題ですが、重複するのを入れますと草稿はもう少し多くなりまして、論題としては二百五十四題と言われています。

これがいま刊本でもって見られるところの宗要・義科・問要それぞれの論義書の主なものですが、宗要と義科を合わせたものが『例講問答書合』です。これは猪熊の良聖によるものでして、十二卷あります。論義では必ず正副二題を並べて問答してゆきます。あとでその実例をお目にかけますが、正問題を業義、副問題を副義といいます。業義はやはり主要な問題ですから、本書では宗要を業義として、そして副義には、義科をもってきます。

それぞれ百題ずつありまして、この宗要と義科を書き合わせてそれぞれ一条のペアとしていますから、これを『例講問答書合』、略して『書合』（かきあわせ）といいます。

『台宗二百題』というのは、こういったものを全部合わせまして江戸時代に編纂されたものです。宗要・義科・問要のそれぞれ、宗要は九十四題、義科はこのうち十五算四十三題、問要は七十題でありまして、合わせて二百七題。それぞれの論目を資料の③に書いてあります。

初期の比叡山の論義もやはり南都の論義が手本になっていますから、講論する者は法華経を中心として天台学の問答を行います。南都論義に手本を仰いだわけですから、問題の正問題と副問題を合わせて行います。業義、副義として、ペアにして同時に問答していく、あるいは三重に問答していくなどというのも南都論義のそれに習ったはずです。

しかし、業義、副義の論題の選択等について、初期の南都論義は仏教論理学の因明の問題を副義の問題にしました。なぜならば論義というものは道理に、典拠に基づいて行われるものですから、論理学の法則に基づいて、仏教に説かれている因明のそれに違背してはいけません。そこで必ず副問題、副義は因明でした。ところが南都において因明は専門でしょうが、叡山においては天台大師の教学に因明などというものはありません。あるいはサンスクリットそのものについても、原典のそれには時代的なことからあまり関心がなかったわけです。そこでこういうおもしろい記事があります。それが資料②です。

『扶桑略記』はかの法然上人の最初の得度の師である、比叡山の東塔、北谷の皇円という人が書いた歴史書です。この延久四年の条に、円宗寺において法華会が修行されたとあります。法華会がはじめられたにすぎないのに、ここに北京二会という表現が出てきますので、書かれていることの客観性についても疑われる面があります。

「天台の論義」

が、のちの伝聞ということもありましょう。ともかくここには大変おもしろいことが書かれています。

円宗寺に行幸して二会八講を修される。天台已講を置かれる。講師は阿闍梨頼増で三井寺、一の問法印大僧都頼眞で興福寺からです。講師はもちろん天台の北京の三会ですから、叡山側から出るわけです。ところが副義に因明の論義が出ました。自宗のことではない、自宗にあらざるがゆえに答えず。答えられなかったのでしょうか。それは自宗の専門のことではないから答えないと開き直ったというわけです。

問者いわく、「立」というのは所立ですね。命題を立てて答える。眞偽を破すること、因明に過ぐるなし。因明に準じなければいけない。之に依って叡岳六月の法花會、因明義を副にして圓宗學者多く習學するところ也。初期においては叡山でもやっていた。いわんや三会、大堂、大堂というのは叡山の大講堂で行われる勅会の權威ある広学豎義のことですが、その三会や大堂に準ずる二季講演の置かれるこの日、すでに朝撰にあたる、朝廷からの指名でもって講師にあたっている二會の講師たる者がどうして因明のことに答えることができないのか、というわけです。

講師いわく、幼學の昔より山家の所用にあらざるに依って以前からそんなことは学んでいません。ただ一心三觀の教文を、天台の教学を、一実境界のそれを習い、老年の今になって三密同体の教えを兼ねて密教も学んでいます。伝法灌頂の壇にも上ったけれども、そしていま堯日照らし朝恩に臨む。晴れの場に指名されることになった。たまたま希代御願の栄えの直会の講師を務めることになった。しかし、本宗の所学にあらぬ因明に答えることはできない。そもそも因明の義、兩衆三徳の談、米齋六句の説なんていうのは因明の因縁譚にあるんでしょか、要するに陣那、ジグナーガー等の因明は外道を破するためのもので叡山のことではない。伝教大師も因明は天台の法性の理をあらわすに効果のあるものではない、雑学にすぎないと伝教大師がこう言われたかどうかは疑問です。こういうふうに言つてとうとう答えなかったということです。

それが問題になりました。叡山のほうでもそれは捨ておけないというので、あとのほうにありますように、天台座主法印大和尚位勝範等奏して山家の学者すべて因明を答え申すべからず。それを省いてもらいたいという申請を出します。叡山のほうからそういう願いが出たので、詔にいわくあとの後勅を待て。こういうことでもって因明の論義をしばらく停止す、となりました。

そこにまだ細かく注がありまして、比叡山から最初の南都での講師の撰にあたったのは義眞でしたが、その義眞さんもやはり答えられなかったと書かれています。しかし、義眞が叡山から叡山の衆望をになって、初めて南都へ行つて因明のそれに答えなかったということは考えられないし、またそういうことは他の記録にもありません。このとき因明のことに答えなかったことを、理屈をいって、義眞にもそういう例があるんだと強弁したんだらうと思います。こういうふうには比叡山の論義そのものが比叡山の権威といえますか、論義というのが盛行にするにつれて比叡山独自の構成をとるようになっていきました。

中世は、最初に言いましたような比叡山独自の口伝・観心主義の傾向がやはり論義にも強くなっています。それを嫌ったのが江戸時代の天台の学を担った学匠たちです。元龜二年、西暦一五七一年、信長の焼き討ちに遭つて叡山はいったん滅びますが、徳川三代将軍家光公のあたり、天海さん等の努力によって復興します。そのときに比叡山の教学として、特に比叡山の戒律の復興が起りますが、それも伝教大師によって打ち立てられた大乘戒ではなしに、形式の面でも細かく律するところの伝教大師が否定された奈良の具足戒を保たなければいけないという戒律復興運動が起ります。これが叡山の安樂院の学匠たちから出てきまして、叡山の伝教大師の主張を大きく変えるわけです。仏教の復興のためにするのですが、ともかくいままでの中古の流れをいったん断ち切る、中世の雑乱を全部断ち切ってしまったわけです。

そこで彼らが権威としたところのものは趙宋天台です。中国の宋の時代、唐の五代のあとの宋の時代の四明知

「天台の論義」

礼さんの天台学です。それによって中世の例えばいまの貞舜の『柏原案立』などは中古天台の各流の異説等が盛られて大変興味深いものですが、趙宋天台の立場、四明知礼の天台教学の立場からそういったものをみな排除していきます。もともと、天台大師、あるいは六祖荊溪大師の所説を權威としてきましたから、四明の教学を正統とするといっても、論義の主要な部分では四明さんのそれを引くことは少いのです。しかし、会通の箇所とか、あるいは付随的なお尋ねと称するところの問題といった部分に、いままであまり重要視されていなかった四明さんの説を依用します。天台論義は、中古における比叡山の、奈良のそれを手本としながら、中古に至り独自の展開を来たします。それと似たようなかたちで鮮明に変わったのがこの『台宗二百題』の撰定でして、凡例の部分にそのことが説かれていますので、これをここに挙げておきました。

宗要・義科・問要それぞれの論題について、天台学を専門にされた方でしたら、この問題を見てもらうと、論義を直接やっておられなくてもだいたいの扱いがわかりいただけるかと思います。それ以外の方には、この論題をお見せしてもあまりピンと来ないと思いますが、いちおうこういうふうな論題がこの『二百題』にしたがって行われているということをおわかりいただきたいと思っています。

いま行われているところの論義は、山の二会である霜月会と六月会。あるいは東塔、西塔、横川のそれぞれの堂において行われる論義、先ほど言いました浄土院の伝教講。定心坊八講というのは横川四季講堂の五部の大乘を講演する四季講のほうはすたれましたが、法華八講としていまも続いています。特に正月の元三会は嚴重な方たちで元三大師が亡くなられた時刻、未明の朝の五時に入堂して二時間ほどの論義法要を勤めています。

そういった日常の論義は、だいたい『二百題』を基本として探題より出題されることになっていますが、特別な場合には問要論義の、『百題自在房』から出しています。毎月四日の伝教大師のご縁日に、ご墓所でもって行く例月の牒論義の伝教講の場合、正月だけは講経論義のかたちをとり、しかもとくに『百題』から論題をえらんで

出すという習わしになっています。このように現行では『二百題』に主として依り、特別な場合『百題』を用いています。

次に日常的な論義問答の例として法華三問一答論義についてお話しします。三問一答、法華八講、十講とそれぞれ形式はありますが、その法華八講の一、五、八の巻をとりあげ一講師に三人の問者が一、五、八の問を分担して行うことから、三問一答論義といえます。まず、法華經乃至各巻各品の講釈を講師が行います。これを巻釈、經釈あるいは品釈とも言いますが、一卷全体を講義するのを巻釈、一經全体を経釈といまして、三十講のように各品の場合は品釈となります。法華八講の場合は巻釈となりますが、法華三問一答論義の場合は、その巻釈は最初の一の巻だけをやって、あと一、五、八の巻について続けて問答を行う。第一の巻については二百題より出題して、三重の問答を行います。法華三問一答論義というのは、法華八講の略と考えていただいたら結構です。

法華八講の場合は、講師の作法に入る前に唄散華、いわゆる天台声明でもって仏を迎え、莊嚴して花を供える、そういった音用作法があります。八講・十講などでも略義の場合や三問一答の場合、講師だけが三礼如来唄という。やはり声明ですが、これを講師が一人で唱えます。唄散華を用いるときは三礼如来唄を用いず、唄散華を用いる場合は、講經論義のような盛儀です。

三礼如来唄は略して。啓白、これは法則（ほつそく）とも申しますが、ここから始めます。最初は講演の趣旨、祈りの言葉を述べます。經釈というところから法華經の序品第一、第一巻、第一巻には序品と方便品の二品が入っていますが、これを講釈します。これも文章が決まっています。普通はこれをそのまま用います。それでは資料④の啓白から唱えます。

「天台の論義」

(資料④)「法華三問一答論義」参照)

〔啓白〕 読誦〕

これが法華八講ですと、八座というふうになるわけです。

〔神分〕 読誦〕

最後、丁して般若心経一卷を黙読します。

丁して、やはり大般若波羅蜜多経と経題を黙誦します。

〔勧請〕 読誦〕

初めの座だけは勧請の初めからやりますが、法華八講などの場合は第二講(二ノ座)以降はあとの四句、「願我生生見諸仏」以下のみを用います。これを揚勧請(あげかんじょう)と言います。法華八講の場合、あるいは講経論義の場合などは、経題を挙げて当たれる巻の経文を読誦している読師というのが講師と並んで八講壇に登りますが、三問一答の場合は読師がありませんので、講師が合掌してこれを唱えます。

〔経釈〕 読誦〕

妙法蓮華経序品第一の略釈です。題目の解釈は「法華玄義」により、大意は「摩訶止観」に通じ、その次の入門判釈は「文句」にのっとっています。天台の三大部に準じてそれぞれ講釈をほどこしています。

〔析句〕 読誦〕

この析句のところで、問者は問いを発する場合に跏坐に入ります。半跏坐になりますが、最初の「そもそも」は普通に言います。

「三問一答の儀則」のところが、八講ですと八座の儀則となります。

あとの「そもそも」は「もうそも」と唱えます。一番終わりの「もうそも」でもって経釈が終わっていいよ

問答が始まりますから注意を喚起するため音用も高く唱えます。

〔「一之問」 読誦〕

これは三座ありますが、一座だけをやります。二重、二重まで書いてありますが、初重、二重、次のページの三行までが業義、主題の問題です。それから二とありますが、ここからが副義です。それぞれ相手の唱えた文句を復唱します。これを取上（とりあげ）といいます。その取上の場合、いま答えたその時間的に近いほうから取り上げていきます。初めはおわかりにならないかと思いますが、問者は下に注がしてありますように裸の漢数字、講師はカッコの数字の順です。問者は白音（しらごえ）といって大きく明白に、講師は宿德音で地ごえです。

〔「一」を讀誦〕

次にページの「二」です。

〔「二」を讀誦〕

講師の取り上げです。「(一)」ですから、そのままです。

〔「(一)」を讀誦〕

取り上げですから「ト」とつけます。

そして初めの「(二)」にいきます。

〔「(二)」を讀誦〕

これが取り上げです。

答えるときには如意か、如意がない場合は扇子を持ちます。左側にカッコで書いてある付け言葉は講師の付け言葉です。

〔「(三)」を讀誦〕

「天台の論義」

講師の答え「(三)」です。続いて

「(四)」を讀誦

講師の初重の答えが済みました。問者第二重は「三」です。講師の答えの取り上げそのままです。

「(三)」を讀誦

そして前のページの「四」です。

「(四)」を讀誦

取り上げに続いて、まさしく第二重の間、「五」です。

「(五)」を讀誦

この「ト等」の「ラ」というのは、本文でなしに、文章の引用の略ですから、「トラ」というふうに読みます。

「ト」までが本文で、「等」は「ラ」と発音します。

「(六)」を讀誦

業義には、二重の問いのときには疑いあり、そのときは爾者（カラバ）というのを添えます。

そして講師の取り上げです。

「(五)」を讀誦

「(六)」を讀誦

次いでまさしく答えです。

「(七)」を讀誦

「(八)」を讀誦

「相違なし」とも言いますが、「相違なし」というのは講師の用いる言葉ではありません。「相違あるかないか」

というのは精義者が言う言葉であつて、「相違なし」という言葉は用いないほうがいいと言われます。十講の場合は音用が変わります。初めのところだけ言います。

〔「一」を十講の音用で読誦〕

答へのほうはこうです。

〔「二」を全しく読誦〕

テキストは違いますが、このように十講の場合だけ音用が別で、八講と三十講は同じものです。

これが二重までですが、特に出題された場合には第三重が大変精細な形式でもって行われます。資料⑤目の「草木成仏」の論稿がその例です。『二百題』宗要の部の一例です。(資料⑤)

「これについて」というところから二重です。第二重の問を「難勢」といい、答へのほうは「会通」といいます。三重は問者のほうが難勢を重ねるわけですから、三重の場合を重ね難といえます。答へのほうは重答となります。重難は道理、文証、料簡、御尋(おたずね)、所詮とありまして、所詮というのは結びの文章です。結びの文章はこういう論草には書いてありません。問・講それぞれが自作するものです。答へのほうは重答です。重答はまず初めに所立、自分の言わんとするところを述べます。この所立は道理と文証とで構成されています。会通はいまの問者の五重の構成、道理、文証、料簡、御尋、所詮をそのまま受けて、それを論駁していきます。会通は最初の道理、文証の二段をあわせて御難(おなん)といえますので、これを合わせてやっています。

三重に入る場合、探題より指示があります。業、副ともに出題があつて重難がつく場合もありますが、普通、出題があるのは業義です。その場合は「業義について重ねて難じ申せ」と探題がおっしゃいます。そこで問者は重難に入るわけです。重難が終わって、講師重答は所立・会通と進み、会通は構成にもよりますが、普通は一重

「天台の論義」

の御難、そして料簡と御壽は普通、複数になります。二重あるいは三重の料簡、何箇の御尋、結ぶに所詮の重、精妙なれどもあえて講答が所立を遮せざるか、なお、甚々深の奥旨に至っては精義者のご判断にあらわれいこうずるでそう、こういう付け言葉で講師が終わります。『二百題』等にはそのような付け言葉はありませんが、先の三問一答の問答のところにも小さな字で付け言葉があったように、初重、二重とともに、重難、重答のところでも段落の前後にはそれぞれの付け言葉があり、それぞれ故実によるところの論草のつくり方があるわけです。

探題がおられない場合もありますが、その場合は「ご本尊のご内観に顕れいこうずるでそう」というふうな言葉で、問答を終わります。探題がおられる場合には、探題さんが先ほどお話しした三重の問答を精査して、所立の、答えの足らざるところを指摘して、「いま一度これらについて通申あるべし」と言われます。豎義の場合は更に答えますが、普通の論義の場合には探題の「通申あるべし」というのがありましたら、一礼するだけで答えません。そうすると探題がそれに対して助け船を出して、精査のすえ「申したり」というふうな言葉で講師の答を可とし、あるいは豎義では合格の判定があり、そして、最後は鐘で終わります。

広学豎義の場合は五問十題で行われ、その全部合格ということはあり得ません。及第の場合は「得第」、落第は「略」といいます。資料の注にも書いておきましたが、いずれともない場合は「未判」となります。普通の論席では、得略等はありません。

最後に現行の経歴行階ですが、天台座主はこのような重要な論席をすべて務めていかなければいけません。時間が経過していますので、簡単に申しあげます。法華円教のほうの経歴が登壇受戒、豎義遂業になります。下に両会の問講とありますが、この両会というのは、霜月会、六月会の法華十講とは別です。山上の二会というのは法華十講ですけど、この両会はそれとは別の山家会と霜月会の講経論義です。

そして、この間・講を務めたものが長講会の五役をつとめます。伝教大師のご廟所における六月四日、ご命日の論義を行います。この長講会は現在叡山でのもっとも厳肅な論義法要です。全探題ご出座のものと、天台宗の長老の揃い踏みのような論義です。これにおいて執事、これは奉行の役ですけれど、あと、唄師、散華師、講師、一ノ問という主要の五役をこなしたものが、この場において戸津説法という、伝教大師に由来する伝統ある法華経講演の行事が八月に五日間行われますが、その説法師に指名されます。そして、この戸津説法師を勤めた者がいわゆる出世役たる望擬講乃至探題・天台座主への階程に進みます。昔は学階といいましたが、いまは法階と言いまして、望擬講、擬講、已講を経て、探題に至ることになります。戸津説法を終わった者が望擬講になる資格を得るわけです。

この望擬講は毎年できます。広学堅義は現在、霜月会、六月会をあわせて五年に一度の法華経の大講演会というかたちで開催される法華大会（ほっけだいえ）に附属して日中の大会に続いて夜儀としてとり行われますが、その法華大会、あるいは広学堅義でそれぞれ主役を務めるのが擬講、已講、探題です。探題のうち先任の探題が天台座主になります。望擬講には、戸津説法が終わってすぐに任命されるわけではありません。何年かまとめて数人の者が一度になる場合もありますし、あるいはその年になる人もあります。それぞれの事情によります。望擬講のなかから擬講が選ばれ、擬講からは健康等で引退した場合を除いて一列に並びます。

この場合、望擬講は選挙権、被選挙権をもちます。擬講、已講、探題は選挙権をもち、このほかに宗務総長と本山の責任者であるところの延暦寺執行（しぎょう）の二人は、選挙権をもちます。もっとも望擬講であれば被選挙権もあるわけです。そして望擬講のなかから擬講を選挙します。擬講が一人選挙されて、法華大会の前に本来の広学堅義のかたちのものが、天台座主の地位の少し前の探題、已講、擬講という人たちによって行われます。これを別請堅義（べっしょうりゅうぎ）といいます。

「天台の論義」

広学豎義のほうは、江戸時代以降、宗徒のみながだいたい受けることになりましたが、別請豎義は昔の精選された権威をもっています。これは四年ごとに法華大会の前、その年かその前の年の適当な時に行われ、擬講がその講師に予定されます。別請豎義において擬講が講師を務めたら已講になります。そして、この已講は次の別請豎義のときに問者を勤めますと探題に補任されます。法華大会、豎義に際して別請豎義によってそれぞれ新しい已講、探題ができ、その已講、探題が先任の探題とともに法華大会、あるいは広学豎義のそれぞれの重要な諸役をしていきます。このように勤めていきますので、天台座主は先任探題の任として、座主が亡くなられても選挙をしたり、選挙したりすることはないわけです。

本山の者は両会の問講、長講会の五役を全部経過していきます。地方の方は、両会は問・講どちらか一つ、長講会の五役は二役です。これは一年にいったんしかないわけですから、長講会の五役、両会の問・講といったものをやるだけでも何年もかかります。私は長講会の五役のうちの講師と一ノ問を済ませたところです。いまの天台座主は九十四歳でお達者ですが、天台の場合はこういうものを経過していかなければいけませんし、擬講の選挙があるのは四年にいったんですから、どうしても年がたってしまいます。

時間を厳守するように言われていましたのに、だいぶ経過して申しわけありませんでした。まとまりのない話になってしまいました。申し落しましたところは資料等をご覧いただいたら幸いです。

司会 長時間にわたりましてありがとうございます。天台の論義を歴史の面から、また、かたちの面から、文献の面から、わかりやすく概観していただき、さらにはまた実際に唱えていただきまして、ありがとうございます。これを参考にしまして、われわれは論義をいっそう深めていきたいと思えます。先生、本日はありがとうございます。